

やりがい

がんは、高齢者の患者が多いのですが、若い人もかかってしまう病気で、治療しながら働いている人には、副作用はとてつらいです。副作用が起きない薬を使うことができれば、治療をしながら仕事をすることができると思います。人の命助けられるのが、何よりもやりがいです。

なりたい人へ

高校では物理と化学の勉強に力を入れていたので、生物を本格的に勉強し始めたのは大学生になってからです。苦手な教科は英語でした。でも、論文などに英語は必須なので、猛勉強しました。学生の指導もします。生物分野の面白さや研究の目的を分かてほしいと思い指導しています。次世代の研究者を育てるのも大事な役目です。

なるための道

研究者になるには、大学卒業後に大学院に進学する人がほとんどです。大学の指導者は、教授、准教授、助教という段階があり、奥村さんは助教。「45歳から一人前」といわれる研究者の中ではまだ若手。大学の研究者は、募集が少ないため、なるのは簡単ではありません。研究者は、製薬会社や食品会社、化粧品メーカーなどにもいます。

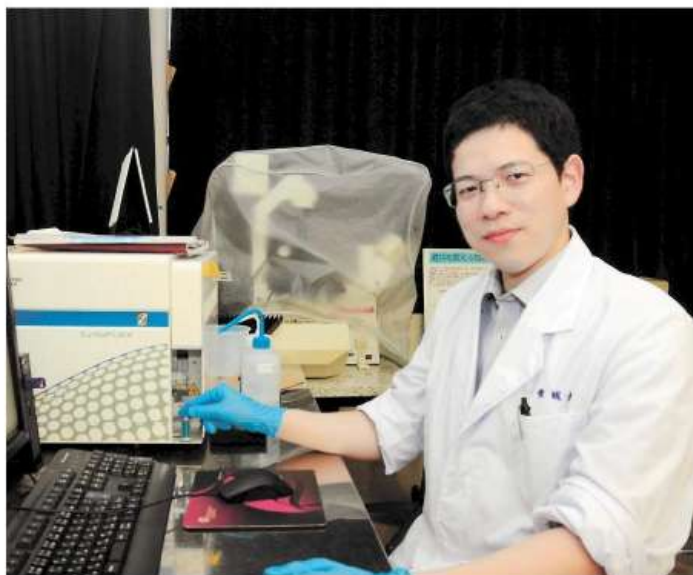


副作用ない がん治療薬を

研究者

崇城大生物生命学部助教

奥村真樹さん(33)



細胞の特徴を解析する機械を操作する奥村真樹助教。5月、熊本市西区

顕微鏡を使いながら学生を指導する奥村真樹助教(中央奥)

がんは日本人の死因の第1位で、多くの人が苦しんでいる病気で、今回は、がんの治療薬を研究している崇城大生物生命学部生物生命学科の奥村真樹助教(33)に、どんなことを研究しているのか、なぜ研究者を目指したのかなどを教えてくださいました。(豊田宏美)

子どものころから理科や実験が好きで、高校時代の部活は物理化学部。病気で亡くなる人の存在を身近に感じ、「人の命を助けたい」と思うようになり、高校生の時に、崇城大を紹介するパンフレットで、副作用のないがん治療薬を研究していることを知り、入学を決めました。

大学と大学院で、がん細胞を自然死に導く人工細胞膜「ハイブリッドリポソーム」の研究に取り組みました。博士課程修了後、食料品会社に就職し、品質管理の仕事にしました。しかし、がん治療を研究する道を諦めきれず、3年前に崇城大の助教になりました。

がんの治療薬は、吐き気や髪が抜けるなどのつらい副作用が出る場合があります。奥村さんの研究室では、副作用がない薬を医療現場で使えるようにするため、がん細胞の種類と薬の濃度などの条件をさまざまに変えながら、効果を証明しています。結果は同じものが3回出る必要があり、違う結果になれば何度も何度も繰り返します。「とても根気がいる仕事。効果があると分かっている薬でも、人間に使えるようにするには「なぜ効くのか」を説明しなくてはなりません」

奥村さんが取り組んでいる研究は、崇城大で40年ほど前に始まったものです。薬として人間に使える

ある日のスケジュール

- 9:00 研究室に出勤。授業の資料を作成する
- 10:40 講義
- 12:10 昼食、休憩
- 13:00 学生の実験指導
- 16:40 学科の会議や論文調査
- 19:00 帰宅

※おしごとの動画を、学びのコミュニティサイト「S+」で視聴できます。

◇
「30年かかると見込みです。」「ゴールは今研究している薬が患者に使えるようになることです。薬を待っている人に早く届けたいと思います。」「日々研究に向き合っています」

◇おくむら・まさき 1991年生まれ、宇城市出身。崇城大生物生命学部応用生命科学科を卒業後、同大学院工学研究科応用生命科学専攻。修士、博士課程を修了し、民間企業に3年間勤務。2022年から崇城大助教。今年生まれた子どもの育児にも奮闘中。